

花咲ける孤獨

尾崎喜八詩文集 3

創文社版

尾崎喜八詩文集 3

昭和 34 年 10 月 15 日 第 1 刷発行

昭和 41 年 5 月 5 日 第 2 刷発行

定価 700円

著 者 尾 崎 喜 八

発行者 久 保 井 理 津 男

電話(231)4008 振替 東京 92472

発行所 株式会社 創 文 社

東京都千代田区代官町 2

~~~~~  
落丁・乱丁本は取替えます

~~~~~  
堀内印刷・橋本製本

目

次

花咲ける孤独

(昭和三十年)

七三篇

告白

冬野

詩心

本国

新らしい絃

存在

落葉

夕日の歌

土地

秋の日

首(造型篇の二)

トルソ(造型篇の二)

短日

朝のひかり

三 四 六 八 一〇 一二 一四 一五 一六 一七 一八 二〇 二二 二三

十一月

雨氷の朝

春の牧場

夏の小鳥が……

薄雪の後

旗

冬のはじめ

本村

夏野の花

或る晴れた秋の朝の歌

雪に立つ

足あと

雪の夕暮

春の彼岸

早春の道

復活祭

三

六

六

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

杖突峠

夏雲

山頂

秋の漁歌

農場の夫人

冬のころ

地衣と星

雪山の朝

安曇野

葡萄園にて

八月の花鳥

晩秋

炎天

盛夏の午後

路傍

幼女

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

老 農

フモレスケ

或る訳業を終えて

展 望

かけす

詩人と農夫

林 間

初 蝶

葡萄の国

単独行

木苺の原

日没時の蝶

音楽的な夜

黒つぐみ

郷 愁

雪

八三

八四

八六

八八

九〇

九一

九四

九六

九八

一〇〇

一〇三

一〇四

一〇五

一〇六

一〇八

一〇九

人のいない牧歌

一一〇

巻積雲

一一一

故地の花

一一四

言葉

一一六

林檎の里

一一八

夏の最後の薔薇

一二〇

Pastoral scolastique

一二三

晩秋の庭で

一二四

反響

一二五

夕日の中の樹

一二六

詩術

一二八

『歳月の歌』（昭和三十三年）から 二四篇

蛇

一二三

遠い分身

一二四

雪の星月夜

一五

山頂の心

一六

岩雲雀

一七

風景

一八

台風季の或る日から

一九

秋の林から

二〇

山莊の蝶

二一

山莊をとざす

二二

目木

二三

女と葡萄園

二四

峠

二五

桃林にて（Ⅰ）

二六

桃林にて（Ⅱ）

二七

桃林にて（Ⅲ）

二八

溪谷（Ⅰ）

二九

溪谷（Ⅱ）

三〇

溪谷(Ⅲ)

一六

木曾の歌(奈良井)

一六

木曾の歌(鳥居峠)

一七

木曾の歌(開田高原)

一七

木曾の歌(寢覚)

一七

我等の民話

一七

その後の詩帖から 二篇

久方の山

一八

立春

一八

眼前の蜜蜂に

一八

花壇にて

一七

二十五年

一八

充実した秋

一八

十一月

一九

生けるがごとき君への歌

四月の詩

元旦の笛

春の前夜

眠られぬ夜に

春愁

受難の金曜日

関心

車窓

玉のような時間

転調

朝のひととき

雲の走る夜

夏への準備

一九三

一九六

一九六

一九〇

一九〇

一九〇

一九六

一九六

一九〇

一九三

一九四

一九六

一九七

一九八

後記

略年譜

二一〇

二一五

花咲ける孤独

告白

若葉の底にふかぶかと夜をふけてゆく山々がある。
真昼を遠く白く歌い去る河がある。

うす青いつばさを大きく上げて
波のようにたたんで

ふかい吐息をつきながら 風景に
柔らかく目をつぶるのは誰だ。

鳥か、

それとも雲か。

疲れているのでもなく 非情でもなく、

内部には咲きさかる夢の花々を群らせながら、
過ぎゆく時を過ぎさせて

遠く柔らかに門をとじている花ぞの、

私だ。

冬 野

いま 野には

大きな豎琴のような夕暮が懸かる。

嚴肅に切られた畝^{うね}から畝へ霜がむすび、
風の長い琶音^{パイン}がはしり、

最初の白い星がひとつ

もっとも高い鍵^{けん}を打つ。

冬は古代のようにひろびろと枯れ、

春はまだ遙^{はるか}かだが

予感^{かん}はすでに天地の間にゆらめいている。

わたしはこの暮れゆく晚い土をふんで

わたしの手から種子を播く、

夕日のようにみなぎって

信頼のために重い種子を。